アメリカ医療のト・リ・セ・ツ

取 扱 説 明 書

渡米してすぐの方も、長年こちらに住んでいる方も、米国医療に関することになると「よくわからない」「もっと知りたい」と感じている方も多いのではないでしょうか。そこで、ミシガン大学の家庭医学科の先生方に医療に関する様々なトピックについてまとめていただき、連載でご紹介します。

Vol. 09

なぜアメリカの医療費は高いのか？

6月から8月まで、どのように保険を利用するかという実用的なことについて書きましたが、読まれた方々は、「なぜ、アメリカの医療はこんなに高いのか」と感じたのではないかと思います。また、実際にアメリカで手術を受けたり、入院治療を受けたりした方々も、自己負担は少なくても、明細書を見てその高額さに驚いた方も多いのではないかと思います。

今月は、なぜアメリカの医療がこれほど高いのか読み物として読んでいただけるように書きたいと思います。アメリカの人口あたりの医療費は、先進諸国の平均の約2倍です。日本の人口当たりの医療費は先進諸国の平均の約85%です。医療システムのランキングは色々な種類がありますが、概ね日本のほうがアメリカよりも医療費に対する医療の内容はいいとされています。例えば、WHOのランキングでは、日本は世界10位、アメリカは37位です。ただ、心臓移植などの特殊な分野では、日本では受けられない治療がアメリカではうけられたりすることもあり、アメリカの医療の質が劣っているということではありません。では、どうして医療費が、世界のどの国と比べてもこれほど高いのでしょうか。

1）国民全員が同じルールで使える健康保険がない

これが、最大の問題点です。世界のトップ10の国は、日本も含めてすべて、国民皆保険の制度が整っています。アメリカは、国民全員が安価な健康保険を得ることが難しい国です。これが、アメリカの健康保険制度の最大の問題点です。健康保険会社も病院も、利益を得るための機関であることが多く、多くの健康保険会社が、それぞれの決まりをつくり医療費の支払いの基準を決めるため、それぞれの会社が、決まりをつくる人員、患者や医療従事者の問い合わせに答える人員、また、個別にカバーを検討する人員などを雇うことになります。ルールが保険会社により、またプランによって異なるため、何が支払い対象なのか、把握しにくいだけでなく、支払いしてもらうための交渉などの人件費が余分にかかります。この人件費も医療費に加算されていきます。また、アメリカでは、日本と異なり救急外来に来る患者さんを断ることはできない決まりなので、健康保険を持っていない患者さんが、具合が悪くなって救急外来を受診した場合、健康保険を持っている人と同様に検査や治療をされ、入院や手術が必要な場合も同様に治療されます。差別なく治療が受けられるのはいいことなのですが、その患者さんには多額の請求が課せられ、払えない場合は医療費は病院が負担することになります。そういう状況が多いため、病院は赤字にならないように、健康保険を持っていて医療費が支払われる患者に水増しして請求するのが一般的です。そのため、額面で見る請求額はかなり高額になります。そして、それぞれの病院がひとつの手技や治療に対して請求する額には制限がありません。全員に同額請求してさえしていれば、高額の請求しても罰せられることはありません。ただ、保険会社は病院と交渉をし、医療費の支払いを減額していることがほとんどです。保険がないために自分で払おうとすると、大きな団体が交渉してくれるのとは異なり、請求されたままの高い金額を払うことになるという不条理なことになります。なぜ、この状況を誰も変えようと思わないのか不思議に思う人も多いでしょうが、政治家も含めて「個人の自由で選べる」ことが大事だと思う人が多く、また「今もっている良い健康保険をキープしたい」裕福な人も多く、これが保険会社が関与しているプロパガンダなのかどうか、私個人には判断がつきませんが、政権が何度変わっても、実際にこれを改革することは困難を極めるようです。

2）薬価が高い

アメリカでは、薬の値段（特に新しい薬の値段）が、他の先進諸国の4倍です。この請求額を政府がコントールしない理由は不明ですが、自己負担が少なくても、健康保険会社は高額な薬のコストを支払うことになり、医療費が上がる大きな理由の一つです。これにより、製薬会社は大きな収入を得ることになります。

3）医療従事者（医師、看護師、理学療法士など）の給料が高い

他の先進諸国に比べて、アメリカの看護師の給料はヨーロッパに比べ、2割ほど高いようです。

4）病院が利益団体である

アメリカの病院で外来や入院での手術や治療を受ける際にかかる費用のうち、医師や医療従事者に払う費用の他に、施設に払う費用があり、これが、医療費全体の3分の1を占めています。この額は、他の先進諸国の2倍から4倍になっています。

5）不必要な検査が増えて医療費がかさむ

医療訴訟が多く、訴えた側が勝訴や和解で多額の補償金を得ることが多いため、医療従事者が「念のため」に多くの検査をすることになり、不必要な検査が増えて医療費がかさむ、ということが指摘されています。ただ、検査が他の国よりも極端に多いというよりは、それぞれの検査の値段が高い、ということが最も大きな原因といわれています。

この様に、政府がさまざまなことを管理することを嫌う国民性のせいか、政府が医療費の設定にかかわらないことが、アメリカの医療費が他の先進諸国に比べてかなり高額になっている理由と考えられます。

そのため、保険会社やプランを選ぶ際にも、多少自費で払ってもいいか、と考えてプランを選ぶ人もいるかもしれませんが、想像している以上にすべてが高額であると覚悟しておく必要があります。どのくらい高いか、実際の例をあげておきます。

実際どのくらい高額か

例1

日本で子宮筋腫切除術を受けたときは、1週間入院して、45万円、3割負担で15万円支払った。アメリカで同じ手術を受けたら、3日間の入院で、手術代は80万円、麻酔料が40万円、入院費が250万円で、自己負担分はゼロだった。

例2

時々動悸が出て、救急外来に行かざるを得ない。1万円の自己負担だったが、薬の値段は400円で、点滴セットが10万円かかったという明細書がきた。なぜ点滴セットがそれほど高いのか、理解できない。

例3

マンモグラフィーで異常を指摘され、詳しいマンモグラフィーと超音波をすすめられたので、検査を受けたら50万円の請求がきて、癌の疑いがあるから生検をしたほうがいいとすすめられたが、見積もりは100万円といわれた。

筆者プロフィール：医師　リトル（平野）早秀子（ひらのさほこ）
ミシガン大学医学部 家庭医学科助教授

1988年慶応義塾医学部卒業、1996年形成外科研修終了。2008年Oakwood Annapolis Family Medicine Residency 終了後、2008年より、ミシガン大学家庭医学科で日本人の患者さんを診察しています。産科を含む女性の医療、小児医療、皮膚手術、創傷のケアに、特にちからを入れています。

ミシガン大学についての情報は、ウェブサイトで確認できます。 https://medicine.umich.edu/dept/japanese-family-health-program

▶過去の「アメリカ医療のトリセツ」はJapanNewsClubウェブサイト（japannewsclub.com)に掲載中。